

【研究ノート】

ケネディ内閣の形成

——ロバート・ケネディ司法長官・その二——

清水良三

目次

- (一) はじめに
- (二) 本論

(一) はじめに

現在世界で最も指導的な役割を果しているのはアメリカ合衆国である。そしてアメリカ合衆国で最も指導的な役割を果しているのはアメリカ合衆国の大統領である。其の巨大な国富と巨大な軍事力とアメリカ民主主義の持つ強力な魅力によってアメリカ合衆国は大統領が誰であろうと常に一定の尊敬心を他国民から抱かれている。そういう訳で大

ケネディ内閣の形成（清水）

統領が誰であろうとアメリカ合衆国はアメリカ合衆国なのであるが、それでも個々の大統領には夫々の個性と能力の相違があつて其の相違がアメリカ合衆国の政治を対外的にも対内的にも変化させるのである。其の相違の中で外国人に一番関係が深いのはアメリカ合衆国の指導性をどういう形式と手続で実現させるかについての大統領のステーツマンシップである。世界政治における指導性が諸外国の国民によって認められるための様式を大別すれば、権威顯示強行指導型と権威黙示自然指導型の二つに分けられよう。このうち権威顯示強行指導型とは或る一国の指導者が自国の有する政治的経済的實力を十分に誇示して、他国の指導者たる所以を強調し他国民に畏敬の念を起させて、自国への服従あるいは追従を実現しようとするものである。此の型の指導は必ずしも恐怖政治と結び付くものではなく權力集中型独裁政治と結び付くものでもない。民主主義国家の指導者の中にも此の型の指導者は存在し得るのであつて彼らは自国の政治経済的・軍事的優越を明示的に利用して他国の指導者或いは国民に自国の政策の正当性を強制的に自覚させようとするのである。此の場合彼らの他国或いは他国民に対する圧力は外交交渉或いは通商代表の同一内容の要求の対話形式による連統提示という形をとり、相手が納得するまで執拗に同一内容の要求を繰り返すことによって相手の承認を獲得しようとする。したがつて要求内容の対外的実現には多くの時間を要するが結局において自国の政治経済的軍事的優越力を背景としての繰り返しであるため相手方は拒否する事が出来なくなるのである。そして其の様な手続を踏んだあとの相手方の承認を民主主義的手続を踏んだ平等者間の契約と称するのである。これが現代民主主義社会における権威強行顯示型の指導である。それは民主主義的手続を踏んでいるだけであるから相手方の国民に不快感を与え共同で世界政治に貢献しているのだという感覚はまったく生まれない。

これに対して権威黙示自然指導型の政治は指導者が自国の持つ政治的軍事的或いは経済的優越性を明確に自覚しつ

つ専ら自国の責任において世界が直面する最も難しい問題に率先して取り組み他国政府或いは他国民がこれに追従するか追従しないかは行動中の指導者の自覚の枠内にはない状態である。此の型の指導者は他人についてこいなどとは一言もいわずに自ら信ずるところの政治的確信に基づいて前進する。従って、他国或いは他国民は、彼の前進の跡を見せつけられて追従するかしないかの選択の場に立たされる訳である。彼がもしも追従すれば其の指導者は指導者たる地位を獲得するが彼が追従しなければ指導者の前進は一幅のカリカチュアへと転化する。其の様な危険性を充分に承知しながら政治的指導の世界に生きるのが權威默示型の自然的指導者である。アメリカ民主主義の理想は他国民にも受け容れられ尊重されているしアメリカ合衆国の政治経済軍事面での優越性も多く他国民に認識され尊重されて来ている。本来尊重されるべき価値のあるものは自然に他国民の賛同と協調を得られるものである。其処に權威默示自然指導型の本質がある。ジョン・F・ケネディ大統領の指導性は、まさに其処にあった。

私はジョン・F・ケネディ内閣の形成に参加した幾人かのすぐれた協力者について、既に国士館大学政経論叢や国士館大学政経学会誌や、国士館大学大学院紀要等に論説を発表して来ているが、今回は大統領の弟であるロバート・ケネディについて其の入閣過程と人物描写をする事にした。「前号」に其の一部を既に発表しているので今回は「其の二」にあたる。連続の必要上最初の部分（約九〇字）は前号と全く同じであることについて、あらかじめお断りしておきたい。なお、ケネディ内閣の閣僚についての素描は今回を以て終りとした。マクナマラ国防長官・ラスク國務長官・ゴールドバーグ労働長官其の他の人々や参考書等については、前掲の国士館大学政経学会発行の諸雑誌のバックナンバーのいくつかを参照されたい。夫々の協力者は夫々が抱く国家観・政治観に基づいてケネディの政治に参加した。彼らはいずれもアメリカ民主主義の理想に忠実な人々でありジョン・F・ケネディの中に偽りのない政治家

の姿を発見した人々であつた。本稿の筆を擱くにあたり、これらの過去の政治家たちの業績に一外国人として高い評価と賞讃の言葉をおくりたい。彼らは政治家とはどういふものであるかについて極めて優れた範例を示してくれたからである。

（二） 本 論

一九五二年にジャック・ケネディは、ヘンリー・カボット・ロッチの上院の議席に挑戦した。ボビーは此の選挙戦を指揮するためにワシントンにおける自分の仕事に別れを告げた。彼は二十六才であつた。そして八年後のジャック・ケネディの大統領選挙戦出馬の時に実をむすんだ彼の確固とした政治的信念のいくつかが、その形をとりはじめたのは、この時であつた。注意深くまわりを見まわしてボビーが判断を下したことは、現存する政治制度にかけている大きな要素は、勤勉と常識であるということであつた。彼はこれらの特徴を現政治制度に付与することを誓つた。後に至つて彼は一友人に不満そうに述べたのであつた。「これらの政治家たちは、輪をつくつて腰をおろし、それについて語り、政治集会において彼らの写真がうつされることだけを希望している。彼らのしたことといえ、それがすべてである」。

マサチューセッツ州スプリングフィールド出身の洞察力のすぐれた若い組織担当者ラリー・オブライエンおよび彼の友人であるケニー・オドンネルと協力して、ボビーはケネディ体制の確立を考案しはじめた。彼は言っている。

「その勝利への鍵は、我々が沢山のことをする少数の人を獲得しようとする代りに、いくらかの仕事を担当する非常

に数多くの人たちを我々が獲得したことにある」。

実際、すべての事、すべての人についての委員会がジャック・ケネディのために組織された。ケネディのために旗ざおがあり、ケネディのために歯医者があり、ケネディのためのイタリー人があり、ケネディのための教師がいた。いくつかの団体はかさなり合ってしまった。だが、ボビーは気にしなかった。誰もが参加しているのだという感じを持つようになっていた。

ボビーと彼の委員たちは、警察から居住者のリストおよび有権者のリストを借り出して来てえらび分けたが、それは民主党地区内のこれらの人たちの中に未登録の人がいないかどうかを発見するためであった。彼らは民主党票の豊かな未開発鉱脈を沢山発見した。州全体にまたがる登録促進運動がはじめられた。そして十万人の新しい名前が名簿に加えられた。マサチューセッツの民主党は、もしも候補者がボストンにおいて充分な大差をもって勝利するならば、其の候補者は州の選挙においても勝つだろうということを常に言っていた。ボビーとジャックは其の事に満足してはいなかった。ボビーは有権者人口六〇〇人以上のすべての町に組織を作ろうと努力していた。

夏から秋にかけて、彼らは強力で偉大な政治家であるヘンリー・カボット・ロッドとたたかだったのであるが、ボビーは一日二十四時間、週七日の労働によって十ポンド目方がへってしまった。こういう初めの頃からでさえも、彼は頑丈であるという評判をとりはじめたのである。知事に立候補していたポール・デヴァは、ジャックに対して選挙戦を共同して行おうではないかと申し出た。だがケネディを支持する人たちは、マサチューセッツにおける未組織の残部が混乱することを欲しなかった。彼はデヴァおよび彼の取り巻き連中と一緒に食事をするために、リッツに出かけて行った。そして、きつぱりと、しかも冷く、ケネディの選挙戦は独立して行いう旨を告げたのであった。斯様な成り

上り者から、そつけない拒絶を受けてデヴァは怒った。だが後にこの二人は友人になっている。

或る日ボストンの政治家の一グループが街を歩いていて、たまたまケネディの選挙本部に入つて来たが、それは選挙事務長に手助けを申し出るためであつた。彼らが最初に驚いたことは、彼らの基準から言えば、ほんの子供であるに過ぎないボビー・ケネディの応待を受けたことであつた。彼らの第二の驚きは、選挙関係文書を入れて発送することになつてゐた封筒の封を閉じる仕事を、その時その場で彼らに手伝ってもらいたいとボビーが言い出した時に来た。政治家たちはドアをあけて出て行つてしまつて歸つて来なかつた。

だが、ボビー・ケネディは封筒の封を閉じるという仕事を下に見てゐた訳ではない。封筒張りをしたばかりか、彼はまたドアのベルをならし、演説をし、また有権者を投票場に案内することとした。そして、選挙の勝利を助けたのである。投票の夜、ジャックは期待されたとおり、此の大都市で集め得るぎりぎりの所まで票を集めてしまつたように思われた。州内遠隔の諸地域からの集計が入りはじめた。ケネディの可能性は縮少しはじめた。ケネディの本部のまわりに集まつてゐた下働きの政治好きの連中は、その日の夕方のはじめには非常に快活であつた、やがてしょんぼりしてしまつた。それは政治的死滅の通常の兆候であつた。一人の型の古い下働きの政治屋がぼんやりと入つて来て「君は死んだ。君は負けたよ」と言明した。だが、ボビーの新しい政治的商標は、古い人たちの予感にたよつてなどいなかつたのである。

彼は集計板を見つめた。そして彼らは州の遠隔地で敗北してゐるけれども、彼らの負けてゐる隔差は伝統的な民主党の敗北率よりも大体五パーセントは少ないということに気がついた。其の夜ボビーは計算尺を持っていた。そして票数が書きこまれる数分前にその使い方を習つたのであつた。最初から彼は州遠隔地の増勢傾向はジャックを救うで

あろうと見積っていた。小さな都会や町を無視していたポール・デヴァは、二万五〇〇〇票で負け、ジャック・ケネディは七万票で勝った。

ワシントンに帰ったボビー・ケネディは、ジョー・マカーシー上院議員の政治活動調査小委員会に働くことになった。この委員会はちょうど其の頃きいた噂をたてられはじめた頃であった。後になってボビーは彼がこの調査活動に参加したのはジョー・マカーシーが原因ではなかったと述べているのである。「当時、私はその仕事が必要とされる必要があると思ったのだ」と、彼は言っている。この委員会の首席顧問である論争好きのロイ・コーンは八人の助手を持っていた。一般顧問であるフランシス（フリップ）フラナガンは四人の助手を持っていたが、その中の一人がボビーであった。彼はいつものとおり、そこでもはげしく働いた。そしてやがて、当時朝鮮においてアメリカ合衆国とたたかっていた共産中国のために中国沿岸に補給品を運びながら、英国の国籍を掲揚していた二艘の船に関する事件を暴露することによって、世間にその名を知られたのであった。

だが、ボビーは満ち足りた感じは持っていなかった。彼はコーンによる共産主義関係の事件の取扱いに、間違っていると思った。或る時、彼はマカーシーのところへ出かけて行って、もしもコーンが委員会の顧問たることを続けるならば、委員会は破滅の方向に向っていくことになるだろうと述べた。ボビーは辞職したいと思った。マカーシーは委員会の構成を見直すことを約束して、彼に留任を求めた。だが、マカーシーはその事についてまったく何もなかったのである。それでボビーは辞職したのであった。次に彼は政府の行政改革について大量の勧告を集計しつつあったフーバー委員会に参加した。だが、ボビーの身におとずれたと思われた小休止は、この仕事でまた忙がしさを取戻して来た。そして彼は再び休みなく働くことになった。一方、マカーシーのやりかたに抗議をしてこの委員会から離

れていたマカーシー委員会の三人の民主党委員、ジョン・マクレラン、スチュアート・サイミントン、およびヘンリー・ジャクソンの三人は、再びこの委員会に帰って来ていた。彼らはボビーに少数派の委員になってくれるように求めた。すると、ボビーはすぐにこれを承知した。

ロイ・コーンとの衝突は避けがたいものであった。この二人は実際すべての重要な事件について相争った。公聴会でジャクソン上院議員が、コーンの友人であり助手でもある調査官ダヴィット・シャインがどんなに馬鹿げている男であるかについて述べた時、コーンはこの公聴会が終ったあとで委員会のテーブルに脅迫的な調子で寄って来た。「あなたがたの友人スクープ・ジャクソンに言っておいてくれ。月曜日にお目にかかる」と、コーンは脅迫の言葉をはいたのであった。

「消えうせろ」とボビーははねかえすように言った。

彼とマカーシーとの関係はきわめて緊張したものになっていた。マカーシーの委員会運営の方法は間違えていると彼は公然と語った。一方、マカーシーは、彼がコーンやシャインを糾弾すると幾人かの彼の強力な後援者の支持を失いはしないだろうかと考えて、ボビーが「非能率的で不正確で信頼が出来ない」と言っていた此の二人の活動について、どんな措置をも採ろうとはしなかったのである。

マカーシーの権力と影響力がおとろえてくるにつれて、ボビーは公聴会のレポートを書くのに主役を演ずるようになった。しかも此のレポートは両党から承認を受ける必要のあるレポートなのである。こういうレポートをつくるということは、斯様に圧力の過当な雰囲気の中にあつてはそう簡単なことではない。一九五五年のはじめに民主党議員たちが議会の支配勢力となると、ボビーは常設調査委員会の顧問に昇格した。

其の年ポビーはロシアおよび其の周辺の地域の広範囲の旅に出た。同行したのはダグラス判事、期間は七週間であった。この二人は初めてシベリアへ入ることを許された人たちの仲間であった。そしてポビーは、再び一時的ではあるがジャーナリズムの世界にもどった。そしてニューヨーク・タイムズ日曜雑誌のために記事を書いたり写真をとったりした。

一九五六年の大統領候補指名大会がシカゴで開かれるちょうど数週間前、ジャック・ケネディと彼の親しい仲間たちは、ジャックが副大統領候補に指名される機会があるかも知れないという感じを持ちはじめた。ポビーはジャックにそういう機会があるかどうかについて人々の気持を打診した。そしてどちらかというと偶然の形で、もしも年の若い此のマサチューセッツ出身の上院議員が立候補するような事態になった場合、支持を頼むということを、ここかしこで言って歩いた。投票の行われる前夜まで、この兄弟は立候補してみたいものかどうか、はっきりとした決心をつけかねていた。アドレイ・スチーヴンソンを大統領候補に指名する大会が開かれた。そしてこの兄弟はそれに続いて副大統領候補に立候補する決意をしたのであった。これは死物ぐるいの、しかも未だ組織の出来ていない決勝線への突撃であった。ポビーは彼の掌握下にある小人数の作業班に指示を与えることになった。この作業員たちは大部分が家族のものたちであった。彼らはシカゴの夜に向って急いだ。そして翌日明るくなるまでホテルの廊下に入りびたった。ユニース・シュライバーはミシシピの代議員団を説得すべく派遣された。ポビーはアーカンサスのジョン・マクレランや其の他の国会議員の友人に懸命に働きかけた。コネチカット州知事エイブ・リビコフと州委員長ジョン・ペイリーは、ニューヨークの代議員たちを追いかけまわした。そして義理の兄弟R・サージェント・シュライバーは彼の故郷の州であるメリーランドで活躍した。

ボビーは大会のホールの議員席に立っていた。そして勝利が過ぎ去って行くのを見つめていた。大きなたたかいをして、しかもそれに敗れたことに、数分間彼はひどく落胆した。それから事態の現実が心の底辺に入り込んで来た。彼は兄のホテルの部屋へ歩いて行った。彼はまだたたかいに敗れたことに気を沈ませていた。だが彼は突然ジャックに向って言い出した。「これは今までに貴方に起ったことの中で一番幸運なことだ」。他の多くの人たちもこれに同意したのであった。

この大会はボビー・ケネディの経験の幅をひろげるのに役立ったさらにもう一つの政治的教訓であった。後になって彼は次のように言っている「その時私は本当に強い印象を受けた。非常に重要であったのは論争になっている問題ではなかったのだ。それは友情だったのである。そういう訳で多くの人が私のところへやって来て次のように言った。彼らはジャックのために投票したいが、エステス・キーパーに投票するつもりである。何故ならばキーパーは彼らにカードを送って来たり、或はまた彼らの家を訪問して来たからである。その時其の場で私は言った。論争点に注意を払うのと同じように、我々は今度はクリスマス・カードを送らなければいけないのだ」。

此の二人のケネディは一九六〇年はジャックにとつて大統領候補指名を得るためにたたかう年になるだろうと感じたかどうか、その時には問題にならなかったのである。彼らはその事について多く議論はしなかった。彼らが成長してくるにつれて、彼らは益々密接な関係をもつて育つて来たのであるが、この二人の兄弟の間に再び語られざる了解が生まれたのであった。

アドレイ・スチーブンソンの選挙事務長ジム・フィンネガンの助手としてボビーは一九五六年の秋にスチーブンソンの選挙旅行の汽車に同乗した。彼には何もすることはなかった。好奇心がなかったら、彼はこの選挙運動から離れ

てしまったであろう。選挙運動をどの様にやって行くかについて何時の日か彼も知らなければならなくなるだろうという漠然たる感じがあった。七週間もの長い間、彼はその仕事を続けたのであった。スチーヴンソンは汽笛停車が行われるような小さな田舎町がひどく嫌いであつた。そしてよくブラットフォームの後部の方に立つて、彼の演説を読みあげたのであるが、そのため聴衆たちの間に何らの感情も呼び起すことが出来ないことにボビーは気がついた。或る駅でとまった時にスチーヴンソンの助手がブラットフォームに姿を現わして、待ちくたびれている群集に向つて、数分間アドレイは顔を見せられないと言つた。その時アドレイはコーヒーを飲んでいたのである。ボビーはスチーヴンソンの新聞界との関係が崩れて行くのを注意した。それは誰も報道記者たちに注意を払っていなかったからであつた。彼はまたスチーヴンソンが一千二百万から一千五百万のテレビの聴衆をひきつけなければならないのに、僅かに百五十万のテレビの聴衆しかひきつけていないことを知っていた。

再びワシントンにもどつた彼は新しい熱意をもつて仕事に没頭した。そして次の三年間にボビー・ケネディは彼の兄よりも国民の注意をより多くひいたのであつた。ジョン・マクレランの有名な不正取引委員会の主席顧問としてボビーは大きな労働組合の中に巢食う無頼漢たちを情容謝なく追求した。また、それより程度は低かつたが、組合運営の弊害を追求したのである。彼の最初の獲物は巨大なチーム・スターズ・ユニオンのずんぐりした感じの会長デイヴ・ベックであつた。ベックと彼の取り巻き連中は組合の基金を悪用して数百万の金をつくつた。ベックはついに窃盗罪の判決を受けて其の職を退かされた。だが、彼の後任ジェームズ・リドル・ホファに対しては、それ程容易くは行かなかつた。

ボビーはホファがチームスターズの金をベックよりも遙かに広い範囲にわたつて悪用したと非難していたけれど

も、このことはホフアの性格の中でもっとも邪悪な要素ではないという事ものはつきり述べていた。ボビーはホフアが無頼漢や密売業者にすすめて彼の組合に加入させ、彼が組合の全面的な権力を握るのを助けさせていると非難した。実際すべての主要都市で下層社会はホフアと結びついていた。そして彼はチームスターズの地域組織の支配権を握っていたし、或はまたそうしようと努力していたのである。

来る日も来る日も、来る遇も来る遇も、ボビー・ケネディは彼の調査官をホフアの活動分野に派遣した。それは組合の記録を調べ、またなぐったり、爆薬で破壊したり、暗殺さえやりかねない暗黒街でのホフアの戦術のいくつかを知っているながら、おびえている証人たちをつきとめて行くためであった。ボビーの日々の仕事量は十六時間、あるいはもっと長きにわたった。上院事務所の建物の一階にある彼の部屋には窓がなく、複雑な諸事件の準備をするために乱雑にちらかっていたが、彼は其の中を檻に入れられた動物のように行ったり来たりした。「それは毎日毎日ノートルダム遊びをしているようなものだった」と彼は言っている。それから、あがって行って大理石で出来ている会議室に姿を現わすと、彼はけげばけしいテレビの撮影用アーク灯の光にてられながら邪悪な人たちの顔面に質問の矢をあげたのであった。しかもこれらの邪悪な面々の多くは、修正第五条のかげにかくれて容易に本体を現わさなかったり、或いはたゞ自分の正体を現わすまいと努力したのであった。

ホフアはまさに言い逃れのうまい人間であった。一度ホフアは逮捕されて、ボビーの調査官から情報を得るために其の一人を買収しようとした容疑で告訴された。FBIが此の事件に関係していた。そしてこの件に関する映画も撮られていた。ホフアに対するこの訴訟は非常に隙のないもののように思われたので、ボビーは軽率にも、もしもホフアが有罪にならなかったら、国会議事堂をジャンプして飛びこえて見せようと言った。アメリカの指導的な刑事弁護

人の一人であるエドワード・ベネット・ウィリアムズの助力を得て、ホファは陪審を受ける前に告訴をとりざげられた。ウィリアムズはボビーにバラシュートを送ろうかと申し出たのであった。

ホファはボビーの頭から瞬時も離れることのない存在となった。仕事をすればするほどボビーはホファの手が至るところにあるのを感じた。組合の金が悪用され、組合の権力も悪用されていたのであった。ホファは彼のために働く百人以上の弁護士を持ち、また仲の良い友人を持っていた。(会議室ではこれらの人たちのグループはホファの弁護士協会として知られていた)。チームスターズの中で行われた不正取引を弁護するために、数十万ドルの金が弁護士への報酬として注ぎ込まれていたのである。

摘発された金銭や権力の乱用のいくつかを国民は見、聞き、そして息も止まるほど驚いたが、こういうことがあるにつれて、ボビー・ケネディの顔と声は家庭の日用品化してしまった。だが、これらのテレビスクリーンに、ボビーほど屢々ではないが、もう一人の人物の顔が現れていた。それは労働経営関係の不当活動を調査するための特別委員会の委員の一人であった兄のジャックの顔であった。時々その面影がぼやけて偶然その場で見ていた人は、兄弟のどちらがどっちなのか本当にわからないことがあった。だが、ケネディという名前は国民の頭脳に忘れ難いほど刻み込まれて行ったのである。

国全体の喧騒はついに一九五九年に議会にも響いて行った。そして大きな労働組合が希望していたのよりも、もっと遙かにきびしい労働組合改正法案が上下両院を通過し、署名されて法律となった。ボビーの三十五人の調査官によって摘発されたさらに著名な違反者の幾人かの有罪判決が、各地の裁判所において、順番に行われるようになって来た。だが最上部の人たちはなお依然として自由の身でいた。そしてチームスターズを監視するために任命された法廷

付属監視委員は、ホファ側の弁護士たちに依って生ぜしめられた複雑混乱した法律関係の泥沼に追いつまされて、行き詰り始めたのであった。一般民衆の改革への熱意は死んでしまっていた。そしてボビー・ケネディに依って設けられた調査員団は、委員会の解散計画をつくりはじめた。その上、一九五九年の秋にはジャック・ケネディが大統領候補指名獲得運動をはじめ、それが委員会解散への動機も作っていたので、もはやこの委員会を国会議事堂の上院事務所から働きに出る少数の委員たちによって運営して行くことは不可能になって来ていた。この委員会は管理者を必要としたのである。

ジャックの選挙運動の指揮をとり始める前にボビーは、彼の三年間にわたる調査活動についての書物を書き始めた。彼が仕事をしている時間は、以前と同じ位長かった。だが仕事をとりまく諸条件は前よりもずっと良くなっていた。仕事の大部分はヴァージニア・マクレランの彼の美しい家屋敷で行われた。彼はよく水泳プールの側で、太陽の光を吸いこみながら、また時には子供たちと短い時間たわむれ騒ぎながら、原稿を書いた。彼の家族は七人になっていた。そして彼の持っている五エーカーの家屋敷は彼らと彼らの友だちと彼らのペットでにぎやかであった。一九五九年の十二月までに、彼は「内部の敵」を書きあげた。そして、それを出版社に送付した。そしてついに彼は全部の時間を大統領政治につきこむことが出来るようになったのである。

ケネディ兄弟は彼らがそれまでに企図した最大の計画を練るにあたって、友人や家族を呼び集めた。マサチューセッツのスプリング・フィールドから組織担当のラリー・オブライエンがやって来た。不正取引委員会の委員としてボビーの主要な相談相手であったケニー・オドンネルもこの選挙運動に参加した。また同じように委員会の時代から重要な調査官であったピエール・サリンジャーもこの運動に参加した。義理の兄弟スチーブン・スミスもこの運動を助

けるためにニューヨークからワシントンにやって来た。サーグ・シュライバーもシカゴからやって来て働いた。

職業政治家たちは、ジャック・ケネディが年若く、しかもカソリック信者であるということは彼にとって大きな不利になっているので、八年間副大統領の地位について成熟して来ているリチャード・ニクソンと同点決勝をしてみても、決して勝てないだろうと思っていたが、ジャック・ケネディはこういう職業政治家たちにうちかたなければならなかった。一般人たちの人気を獲得し古い政治定則に反証をあげるために、ジャックは大統領選挙人団の予備選挙にいくこみ、そこで勝利を得ようと計画した。まず最初のきわめて重要な闘いは、四月五日ウィスコンシンにおいて行われた。

選挙運動初期のこの当時においては、ボビー・ケネディが選挙運動の事務長に公式に任命されるということは決してなかった。だが誰も、彼が此の選挙運動を主催しているのだということを知っていた。彼は一九四六年にドアのベルを鳴らして以来彼が学んだすべての教訓を、直面する具体例に適用するために、過去の経験にみがきをかけた。一つの確実なことがあった。それは政治においては伝聞にたよることは出来ない。あなたはあなた自身で事実を見つけ出さなくてはならないということであった。すべての忠告を無視して、ボビーは早くから彼自身でウィスコンシンに選挙戦用の侵略をはじめた。七日間彼は雪の路を踏み、或は地方の政治家に話しかけ、時には街路上で人々に質問を発し、あるいは州内における民主党組織の強さを測定したりした。ウィスコンシンにおけるケネディの対抗者は、ミネソタの隣人ヒューバート・ハンフリーであろうと思われた。彼は農夫たちが好きなことや嫌いなことを見分けるのが上手であった。ボビーはこの旅によって、ウィスコンシン州の民主党組織に頼ることは出来ないということをはっきりと知った。彼らはジャック・ケネディのために新しい組織をつくらなければならなかったのである。「ヒューバ

ートのやりかたは間ちがえていた」と、ボビーは言っている。「彼がウィスコンシンの組織にたよることは出来ないということに気がついたのは余りにも遅すぎた」。

ボビーは地域組織の設立を支援するために数千マイルを自動車で走りまわった。地域水準の選挙運動をやって行くための組織をいかにしてつくって行くかについては、オブライエンは手引書をつくっていたが、彼はこの有名な手引書を改訂し、発行した。まだ明けやらぬ暁の空をついて、多くの工場の門前に立って人々と握手をし、投票を頼んでいるボビーの姿が見られた。彼は演説もした。その演説の中には「私がここに来たのは、私の兄のジャックに皆さんの投票をお願いするためです」ということ以外には、何も言わない演説がいくつかあった。

もしケネディがウィスコンシンの十地区のすべてで勝利を占めなければ、それは綺麗な勝利とは言えないだろうという歌があつて、新聞もその歌をとりあげていた。選挙戦の最後の数日になってヒューバート・ハンフリーが烈しく突進して来て、ケネディの陣営にきり込んで来た。ジャック・ケネディは六地区で勝つて十万七千票で非常にカソリック色の濃い此の州を獲得し、代議員総数三十一のうち、二十と二分の一を自分のものにしたのであった。彼は票数の五十六パーセントを得たのであったが、新聞のとった態度のために辛勝であるとは思われなかった。「それは予想されていたほどの輝かしい場面ではなかった」とボビー・ケネディは語った。そしてすぐ其の次の日、彼はウェスト・ヴァージニアに飛んで、第二の難しい選挙戦と言われていた当地での運動を開始したのであった。ここでも亦対抗相手はヒューバート・ハンフリーであつた。だがウェスト・ヴァージニアはまったくウィスコンシンと異っていた。推定によると人口の僅か四パーセントだけがカソリック教徒であつた。面積广大で不景気なこれら諸地域は、ヒューバート・ハンフリーの華麗な自由主義を聴き容れ易く信じ易い状態にあるように思われた。或る時ボビーは密かに使者

を出し、間接的な説得によってハンフリーに手をひかせようとしたことがある。この試みは失敗した。それで彼はこの州をいくつかの地区に分け、そして彼の指揮下にある人物を、一人ずつそれらの地区に派遣した。ボビーは自分の時間を遊説と組織に分けてつかった。五月十日の投票日の一週間前に、彼はジャックが勝つだろうと思った。彼は鉱山地区を旅行した時に気がついたことが気に入っていた。鉱夫は頑丈であり精気に満ちた人たちであつて、ボビーはこれらの人たちの気持ちに訴えるものがあるのを感じた。彼らはジャックが気に入つたようであつた。だが選挙前の週末になると、彼は悲観的な新聞記者たちに談話を発表し、自分一人になると再び出かけて行つた。だがこの時の彼は強い宗教的な偏見にとらわれていた。五月十日にボビーは気をくさらせていた。ジャックが最悪の状態を予想してワシントンに飛行機で帰つてしまつたのだつた。彼は負けた時にウェスト・ヴァージニアにいたくなかつたのである。

エセル・ケネディは急いでチャールストンに向つた。それは落胆しているボビーの側にいるためであつた。選挙の前の晩は雨が降つていた。エセルは垂れこめている甕から身を外して飛行場の斜傾路の端に立つていた。突然ヒューバート・ハンフリーが姿をあらわした。彼の気持はたかまつていた。彼は此の選挙に自分が勝つだろうとはつきり感じていたのである。彼は勢よくエセルのもとに歩み寄つた。そして彼女の手を握つた。「このことが全部終つて我々の気持がいくらか落着いたら、家族たちと一緒に集まりたいですね」とヒューバートは言つた。

「それは素晴らしいことですな」エセルは彼を見つめながら言つた。それから、慰めなければならぬ自分の役目を感じ、急いで駆け出して行つた。そして暗い気持ちになつてゐるボビーの姿をさがした。

「選挙の結果が入つて来始めてから半時間たつと、我々は勝つということが分つて来た」とボビーは言つてゐる。元氣一杯のハンフリーの勢がだんだん涸んで来はじめた時、ケネディの士氣は昂揚しはじめていた。真夜中が近くな

って来た頃、ボビーは其の兄と電話で話しをしていた。「飛んで行こうか」とジャックがたずねた。

「うん、来た方がいいだろうと思う」とボビーは答えた。

ジャックの飛行機がチャールストンに向っている時に、ボビー・ケネディは静かに、人に知られないようにケネディの選挙本部をぬけ出して行った。そして暗い濡れた道を通って、ラフナー・ホテルのハンフリーの居室に向った。「一寸挨拶をしに来ただけなんです」とボビーはハンフリーの手を握りながら、低い声で言った。彼は何とかして敗者をなぐさめようとしたのである。

ジョン・F・ケネディのウェスト・ヴァージニアにおける逆転は、大きな比率で勝者を祝福していた。彼は投票の六十五パーセントを獲得した。この勝利によってボビーは民主党の指名は彼らのものであると感じた。だが彼はそれを偶然の機会に委しておかなかった。ジャックがオレゴンで予備選挙第七番目の勝利をおさめていた頃ボビーはワシントンにおいて七月の大会の準備をしていた。彼及び其の他の人達は選出された代議員の全てに会いに行った。副大統領の指名を獲得しようとした一九五六年のジャックの努力が非常に無駄であった一つの理由は、彼らが大会場の議席に通信組織を持たなかったからだという事を確信したボビーは、六週間も前にロサンゼルスに飛んで行って、ケネディのスカウトたちが各議席の事情を数秒内に知ることが出来るように電話および携帯用無線電話機の設備をととのえるべく綿密な組織計画をたてたのであった。色々なホテルでケネディの日刊タブロイド版新聞を配布する計画がたてられた。代議員一人について夫々一枚のカードが準備された。大会が開かれるや各州の代議員団から一時間ごとに報告を受けるための組織がつくられた。ジャック・ケネディが最初の投票で指名を獲得した運命の七月十三日夜が来るずっと以前に、結果は決まっていたのである。ボビー以上に其の事をよく知っている者はいなかった。ロサンゼルス

・スポーツ競技場のちょうど外側にある選挙本部から、ボビーは必要とされる七六一以上の集計数字があがって行くのを静かに眺めていた。獲得票の最終合計は、彼が予想していた総数と僅かに十票の差があっただけであった。数分後、ジャックは其の部屋にボビーと共にいた。ジャックに祝の言葉を述べるために次第にその数を増して来た多数の政治家の群が、勢よく事務所に入って来たが、それらの人たちと離れて此の二人の兄弟は隅で静かに語り合っていた。ただ一つの感情の爆発がボビーにあらわれていた。彼は右のこぶしで左の手の平を繰り返し強く打っていた。そして僅かな微笑をうかべていたのであった。

父親が訪ねて来て「君の作った組織は私が政治の世界で今までに見たものの中でもっとも優れたものだ」と言ったが、これは最高の賞辞であつたらう。

まさにこの時まで頭のかたい民主党の職業政治家たちは、ボビー・ケネディを少年の驚異であり、何か神秘的な存在として取扱う傾向があつた。彼らは彼らが見たことを実信することが出来なかつたのである。突然ボビーは全国選挙事務長に任命された。この瘦身の人物、その眼はいつも深い疲れの色を示しているし、シャツの袖をまくり、ネクタイはゆるんでいるこの男が、民主党の勝利のために計画を立て始めたのである。そして旧時代の人たちは、なおそのことを信じようとしなかつたのである。「彼はマサチューセッツやウェストヴァージニアではうまく行ったかも知れない」と一人の古い型の政治家は嘲笑して言った。「だがこれからは場面が違うのだ。我々は拝見することでしょう」。

ボビーが前からの決まりきつた同僚および年若い新しい友人たちの幹部を、党内に連れこんで来た時、さらにぶつぶつと不平の声が聞こえた。一人の政治家は軽蔑の様子を示しながら言った。「不満だって？ いや、それはそう多

くない。一日に大体百万回にすぎない」。

「人々は怒っている」とジャック・ケネディは彼の弟のたゆまない頑健さを何か愉快に感じながら言った。「だが、あの人たちはあなたが何をしても怒るのだ。何でも物を動かすものは誰かをひっくりかえす。卵を割らずにオムレツを作ることは出来ない。私は不平を気にしない。マサチューセッツの政治家は一九五二年以後は、誰もがボビーを怒っていた。だが我々は歴史上最も優れた組織を持っていたのだ」。

だが、ボビーはそれを再びやることが出来たであろうか。この国における選挙票の一番ゆたかな鉱脈であるニュー・ヨークは、民主党の相互殺し合いの闘争によって消耗しつつあった。カリフォルニアにおいて受けた大きな傷は癒えていなかった。リンドン・ジョンソンの副大統領指名に対して、南部では色々騒がしい意見が出ていた。全国大会の行われる前に国会が開かれたが、これはリンドン・ジョンソンが彼自身大統領候補に指名される可能性をふやそうとしてでっちあげた会期であった。しかし八月のこの国会でケネディもジョンソンもつかまってしまった。三週間にわたって議会は、重要な民主党法案を通そうとするどんな努力をも挫折させた。そして遂に議会の取扱いについてのケネディの能力に、疑問を残したまま休会に入った。

初めのうち、ニクソンがどの様にして優勢になったかについての色々な人々の声を耳にするにつれて、ボビーは「ジャックが人々の面前に出られるまで待つてくれ」と確信を持って答えたのであった。ボビーの政治理論のすべては、彼の兄は大統領の仕事をするのにもっとも魅力的であり才能にめぐまれているという確固とした信念に基づいていた。ケネディの選挙戦に対する熱意がたかまって来るにつれて、ボビーは出掛けて行って彼独自のやり方で物事を処理することが出来るようになった。敢て彼の意見に反対を唱えるものは殆んどいなかった。それはここ数年来民主

黨員が得られた最高の成績でケネディが勝ち、その結果彼らの反対が無意味になってしまいかも知れなかったからである。

ボビーが頑健であるという噂は益々拡がって行つた。彼は内部がバラバラに分裂しているニュー・ヨーク州へ侵入して行つた。そして三日間で相争っている諸分派を纏めあげてしまつた。ハーバード・レーマン流の改革論者たちには、彼は囁れた声で次のように言つた。「紳士諸君、私はこの州と国家の諸組織が十一月以降に猶お残つていても、呪うことはしない。また貴方がたが生き残つていても、私は呪わない。私はジョン・F・ケネディを選出したいのです」。カルミネ・デサピオやマイク・ブレンダガストなどのボスたちに対しても彼は同じ様にぶっきらぼうであつた。「私が関心を持っている唯一つのことは、ケネディ上院議員を大統領にすることなのです」。

ニューヨークにおいて、ケネディ支持の運動の指揮をとってくれるような人物をえらび見出すことは、至難の業であるということは明瞭であつた。その代りに彼は、今まで国会議員に立候補していつまでも成功したことのないアンソニー・エイカーズに、この地方における政治運動の責任をお寄せた。だが彼はまた、監視し耳を敲だて、忠告し、かつ真つ直ぐにボビーの所に報告に戻つて来る一人の「ケネディの協力者」を自分の陣営に引き入れた。彼はウィリアム・ウォルトンという名のジョー・ジタウンの芸術家であつてケネディ家の友人であつた。州外からのケネディの協力者たちが他の二十九の重要な諸州に派遣された。彼らの仕事はそれらの州におけるケネディ派にとつての僅かな傷口が大きな傷口となつて開くことがない様ふせぐ事であつた。「それはまるでギャザ狭隘地帯^{ストリッヅ}」のようだとボビーは言つた。報道記者として中東にいた時のことを彼は思い出していたのである。「あなたはいつでもそれを監視してはならない。そして小さな戦闘が戦争にならない様に事態を確保しておかなければならない」。

ボビーは一〇〇〇万の有権者の登録運動をはじめたが、そのうち六〇〇万から七〇〇万が民主党に投票するであろうという想像をしていたのである。彼はこの運動をニュー・ジャージーの派手な議員フランク・トンブソンの指揮下においた。トンブソンがなすべき仕事を指示されてからわずか数時間後、ボビーは今まであなたは何をしてくれたかという質問をトンブソンに発した。ケネディのやり方を知っていたトンブソンはこの様なせつかちを予測していた。彼は書記を雇い事務所を設け、重要な民主党員を会合に召集していた。ボビーは大体において満足した。

デンヴァーからボビーはコロラド大学の学者で全米代表としてセシル・ローズ奨学金を設けたことのあるバイロン（ウィズア）ホワイトを、ケネディおよびジョンソンのための市民委員会を指揮して貰うために呼びよせた。ホワイトは大会前にロッキー山脈地域で印象的な活動をした。以前の計画に従ってボビー・ケネディは烈しく活躍したけれども、いまや彼は以前の記録を総て破ってしまった。「私は組織について考える必要さえなかった」とジャックは驚嘆している。「私はまさに本当のことを打ち明けよう。何の躊躇もなく言えることはボビーは私が今まで会った中で一番すぐれた人間であるということだ。彼はもつとも烈しく仕事をする人間だ。彼はもつとも偉大な組織者だ。彼は時間を全く無駄にしない。彼は幻想的だ。彼は神経の上に生きている」。そして父親のジョーでさえボビーについてやゝ驚異の念を持たざるを得なかった。「ジャックは此の世のどの人間よりも烈しく働く」と彼は言った。「ボビーはそれよりも、もう一寸余計働くのである」。

選挙戦が左右に揺れはじめて動静がいずれに行くか分らなくなつて来た時、全国の退屈な民主党員たちからの不満の叫び声が増して来た。彼らのうちの幾人かはジャックの所へ駆け込んだ。「ボビーは、彼の同僚及び本当に何らかの働きをして我々を助けようと希望している人たちの力強い支持を得ている」とジャックは一人の友人に語った。

「本当に価値ある友人を彼は失っただろうか。誰も失いはしない。不平を言う人たちを何とかし得る方法はない。彼らは私もまた好いていない訳だ。彼らは我々の成功を好んでいないのだ」。

政治家の中にはボビーがまったく非情であることについて烈しく不平を言うものがいた。「私は人気競争をやっているのではない」とボビーは言った。「彼らが私を好こうが好くまいが、それはどちらでもいいことだ。ジャックは彼らにとって素晴らしい存在なのだろう。私は人々を反抗させようとはしていない。だが誰かがノーと言える能力を持たなければならぬ。人々がよく働いているにしても、その人々が君のために一肌脱ぐことをしないならば、どうして君はそのことをよく言うことが出来るだろうか。政治というこの仕事では、君が何か決定を下すたびに、君は誰かを怒らしているのだ」。

ボビーは全国的な政治取引において、一つの巨大な利点を持っていた。彼は候補者の兄弟であり、まったく政治における特殊な立場にあつたので一徹に自分の意見を通すことが出来た。彼の地位が生まれながらのものであつたので、誰も彼の地位を嫉むものはいなかった。彼は特殊な儲け仕事をしようとはしなかったし、また外部からのいかなる影響も受けなかった。彼はこれ以上のものはないと言えるほど、あり得べき最強の立場にいたのである。選挙戦が終了する前に、彼は、共和党の最大弱点の一つは、GOPの本部に彼と同じように面倒を起す虞を抱かず決断を下して行動することが出来る人がいないことにあるのだという結論を下した。

民主党は適切な監督者を得て生き生きとしはじめた。そして有名なテレビ討論会の一回目の場面でジャック・ケネディがリチャード・ニクソンに向い合つて立つのを見てからは、地方の選挙事務所にはケネディのために働きたいという人が沢山流れ込んで来た。金銭の処理はより、容易になつて来た。こういう事態の進捗を注意して見ていたボビー

の気持は、昂然として来たのであった。「接近した勝負にはならないかも知れない」と彼は予言した。

だが、よいニュースが続いて入って来ていたにも拘らず、ロバート・ケネディについてはなおも騒がしい噂が残っていた。兄弟の間の意見の不一致について絶えず色々なことが話されていた。事実、一年間というものの此の二人の兄弟が幾つかの極めて重要な問題について、意見がどのように一致していかないかについての囁が、絶えず聞かれたのである。このような報道を信ずることは、此の二人の兄弟の關係がどのようにに行っているかについての誤解を示すことになったのである。色々の意見の相違があった。時々それらは表面化した。だがいざ話されると、それらは必ず静かな雰囲気の中で話された。ひとたびジャックが決断を下すと、それ以上の議論は行れなかった。ウェスト・ヴァージニアの大統領候補予選会に出場するという決定に、ジャックは数日間むつつりと不満気であった。この決定は大部分がボビーの決定によって行われたものであったのである。だがジャックは長い間、以前の事を考えなおしてはいなかった。公認候補者名簿に載っているリンドン・ジョンソンについて大まかな反対があった時、最初ボビーはひどく驚いた。そしてリンドンには公認候補者たる値うちがあるのかないのかについて質問した。ジャックがあると答えた時、この問題は忽ち解決してしまったのである。些細なことでジャックは時々憤慨した。ニクソンの支持者ジャッキー・ロビンソンをボビーが公然と攻撃した時、ジャックは自分の飛行機の上で其のことを聞いた。そして顔を顰め、「我々はニクソンとたたかっているのだ。ジャッキー・ロビンソンとたたかっているのではない」と不平を述べたのである。だが彼らの關係はいつもお互いに抱いている感情の上に落ちついたものであった。

「ジャックは私が知っている人の中でもっともすぐれた政治的判断力を持っている」とボビーは言った。そしてジャックは「私は誰の言葉よりもボビーの言葉を重く見る」と明言している。

ボビー・ケネディのために働いている人たちの間に裏切行為はなかった。不正取引委員会当時からずっと彼の側で親しく働いて来た人は、一番下の方で働いている人たちまで、総て彼に心服していた。また、ボビーは夫々の人に委員会が解散した時にはすくなくとも満足に値する仕事を提供する旨を確言したのであった。選挙戦中に彼を知るようになった人たちも、同じような尊敬心を彼に抱くようになっていたのである。

「彼は私が知っている誰よりも、道徳と人間的な誠実さに深い関心を持っている」と一人の友人は語っている。彼は妥協するのが嫌いであった。だが、力強い誠実さへの突進というこういふ態度は、このような厳格な生活の意味を理解しない人たちにとって、まず第一に苛立たしく思われることが時々あった。「ボビーの周囲に集まる人々は或る主張を信じている人々である」と或る友人は語った。「そういうものを信じてない人は、長くは留まっていない」。

事実、ボビーが政治組織以外の何かについて話す時間を持つようなことがあれば、彼は忽ち哲学的な話をはじめた。「私はこの仕事をただ私の家族のためにしているのではない」と彼は言っていた。「ジャックが私の兄弟だからという理由だけでしているのではない。私はこのことが、我が国に非常な相違をもたらすだろうということを真面目に考えている。我々はアメリカで柔和な生きかたを続けて来たと私は本当に信じている。我々は目覚めなければならない」というのが彼の意見であった。

だが、誰かが賞讃の念をもって、彼の如き才能と富を持つ若人が、斯様な仕事をすることはまことに大きな犠牲であるとして述べたところ、すぐに彼は「そういう考えは馬鹿げている」と言って、其の言葉を斥けた。勝利の味は甘かったけれども考え込んでいる時間はなかった。彼らは政府を組織しなければならなかったのである。またも、ボビー・ケネディは休息をとるといふことをしなかったのであった。ケネディが勝ってから僅か数日後、飛行機でワシントン

に帰って来たボビーは、人物探索班を組織してニュー・フロンティアに参加を希望している人を国中から集めようとした。彼の兄との関係はこの頃益々密接になって来ていた。重要な内閣の閣僚を銓衡する最後の数時間になると、大統領選出候補が實際何を考えているのか知っているのはボビーだけであつた。そして其の次に自分自身がニュー・フロンティアに参加する気持があるのかどうかを決定することがボビーの役割になつて来たのであつた。

若いケネディが司法長官として敏速で精力的なスタートを見せたことは、すくなくとも批評家たちの気持を鎮静化させた。だがネボチズムの問題はなお表面下に潜伏していたのである。彼の就任を承認することに反対するぞとおびやかした後、彼を賞める方に唱和した共和黨員たちも、もしも彼が何か失敗をおかしたら彼の地位を政治問題化しようとして、なおぶつぶつと不平の言葉を述べていた。だが、ボビーは司法長官として適格且つ有能であつた。